遂に高校の情報の教科書がその姿を現した。新聞によると、13社からの31点の教科書が合格したそうである。特に教科書の執筆者などはこの辺りの事情をよく知っているのであろうが、一般人には、情報の教科書がどうなっているのか、どのような授業が行われるのか、ほとんど知られていないのではないだろうか。

高校の情報には、「情報A」と「情報B」と「情報C」の3つの科目がある。「情報A」は実習を重視した基礎的な科目で、情報Bは「計算」による問題解決についての科学的理解を目指す科目、「情報C」は情報化社会を中心とした科目である。俗に「情報B」は理系向き、「情報C」は文系向きと言われているが、情報系の専門家ならば、どう考えても、すべての内容を教えて欲しい、と思うはずである。

「情報B」はコンピュータの仕組みや、問題解決のためにいかにしてコンピュータを使うか、を教えるものだし、「情報C」はコンピュータ・ネットワークに関するかなり高度な内容を含んでいる。私などから見ると「情報C」が一番難しいように思える。「情報A」はそれらの基礎になる。

ところが、驚くべきことに、高校では上の3科目のどれか1つだけを教えることになっているのである。本来ならばすべて教えるべきところを、どれか1つだけを教える、という妥協案には驚かされるばかりである。せめて「情報A」は必修で、「情報B」と「情報C」のどちらかをさらに選択して必修とする、ということならば理解できそうなのだが、「情報A」と「情報B」と「情報C」のどれかを必修とする、という不可思議なことになっている。諸般の事情（たとえば、情報で2科目も必修にする時間的な余裕もないだろうし、教える方の準備も難しいだろう）を考えると理解できそうな気がするが、やはりなかなか納得できない。

ところで、私が一部を書いた教科書も見せてもらったが、最近の教科書は絵本と化していることに驚かされる。コンピュータのマニュアルの方がまだ字が多いと思う。情報の教科書だけではなく、すべての教科書がそうである。ちなみに、うちの子供が持っている小学校の教科書（特に社会科など）と高校の教科書の体裁はほとんど変わらない。ひょっとすると、表紙を伏せて比べたら、小学校の教科書と高校の教科書の区別ができないかもしれない。ゆとり教育が散々と批判されているが、教科書もそれを如実に表しているような気がするわけである。

また、情報の教科書に関してよく聞く批判に、商品

名が書けないということがある。Internet Explorerの写真があったとしても、あのトレードマークは消さなければならない。世界中で何億もの人が使っているソフトウェアの名前を出すこともトレードマークを出すこともできないのは、ナンセンス以外の何ものでもない、という批判をよく聞く。やはり教科書はマニュアル以下ということか。すると、たとえばJava™言語などは、少なくとも教科書では教えてはいけないことになってしまう（実際に、特定のプログラミング言語を教えることはできないようである）。

1つだけ救いなのは、情報の教科書だけは2年ごとに改訂が行われるということである。ひょっとすると、「情報A」「情報B」「情報C」という区分も、かなり早いうちに変わるかもしれない。しかし、教科書の執筆には、2年たったら、また地獄のような日々が待っていることになる。

しかし、このような指導要領はいったい誰が決めるものなのだろうか。よく噂で聞くのは、ノーベル賞級の学者の鶴の一声で指導要領の方針が決まる、というような話である。そのようなことが本当なのかどうかは知らないが、それぞれの分野の「大御所」の意見が影響を与えることはあるのではないだろうか。

ところで、情報系には「大御所」と呼べるような人はいるのだろうか。どうも、その辺がこの分野の弱いところのような気がする。最近、バイオインフォマティクスとか分子コンピューティングとかで、生物系や化学系の人々とつき合うことが多いのだが、その辺の分野には「大御所」と呼ばれる人がたくさんいるようである。「大御所」が良いと言った論文は必ず通るし、科研費も必ず通る。ときには「大御所」は乗り遅れそうになった飛行機を止めてしまったりもする。やはり、情報系にも「大御所」が必要ということか。

参考（学習指導要領からの抜粋）

情報A：コンピュータや情報通信ネットワークなどの活用を通して、情報を適切に収集・処理・発信するための基礎的な知識と技能を習得させるとともに、情報を主体的に活用しようとする態度を育てる。

情報B：コンピュータにおける情報の表し方や処理の仕組み、情報社会を支える情報技術の役割や影響を理解させ、問題解決においてコンピュータを効果的に活用するための科学的な考え方や方法を習得させる。

情報C：情報のデジタル化や情報通信ネットワークの特性を理解させ、表現やコミュニケーションにおいてコンピュータなどを効果的に活用する能力を養うとともに、情報化の進展が社会に及ぼす影響を理解させ、情報社会に参加する上での望ましい態度を育てる。

（平成14年4月15日受付）

萩谷昌己（東京大学／調査研究運営委員会委員長）

第11回 教科書と大御所